日本忍法伝

第27回

作・佐々木守
え・岡本颯子

第23章 牟婁の湯煙

(一)

豊璋は西を見つめて今日も涙した。

宮居の高殿からははるかつらなる山々しか見えないが、豊璋の目はその向こうをみつめている。

怒濤さかまく海と、その海をへだてた生まれ故郷——、豊璋は朝鮮の百済の王子なのである。日ましに険悪の度を加えていく日朝の間柄の中で、ただ一つ大和朝廷に恭順を誓う百済は、その証拠として王子の豊璋を人質にさし出していたのである。

当時、朝鮮半島は大きく三つの国に分かれていた。すなわち、百済、高句麗、そして新羅である。

ついこの前まで、この朝鮮の国々は大和朝廷と深い親交関係があった。

——というより、何度ものべたようにこの両方の民族は同じもので、いわば親類関係にあったのだ。

それがここ十年ばかりの間に、新羅を中心に朝鮮半島の態度は日に日におかしくなっていった。すなわち、大和朝廷と少しずつ分離していくと同時に、陸つづきの大国・唐との間に親しさを増していったのである。

新羅では六四九年、服制を唐と同じように改め、年号まで唐のものをもらった。六五四年、金春秋が王位について武烈王と名のってからはその傾向が一段と強まった。武烈王の真意は、唐の力をかりて百済と高句麗を滅ぼし、新羅一国による朝鮮半島の征服にあった。

だから豊璋の涙は二つの意味がある。

一つは勿論、王子として厚遇はされてはいるものの、人質としての自分の身の上の淋しさと望郷の念の涙である。

そしてもう一つは、嵐の前の如き祖国の運命を案ずる涙であった。

その百済王子・豊璋の目が、いきなりぱっと二つの掌で目かくしされた。

おどろいてその掌の上に掌を重ねた豊璋は、その手がやわらかな女の手であることをさとった。

「どなたですか

軽いいたずらっぽい含み笑いが聞こえた。

目かくしした手にある優しさと、うっすらとした汗を感じたとき、豊

璋はその目かくしの主が誰だかさとった。
「額田王、ですか」
「あたった！」
目かくしをはがされてふりかえった豊璋の前に、いたずらっぽい微笑をうかべた額田王の顔があった。
「今日もまた、お国を思って泣いてらしたの？」
「いや、私は泣いてなど……」
「うそ」
額田王は掌をペロリとなめた。
「ほら、しょっぱいもの。涙が私の掌についた証拠」
・そういうといきなり額田王は両手をのばして豊璋の首の後へまわした。黒い長いまつげの額田王の目が、豊璋の目のすぐ前に来た。
「百済の王子さま、お淋しくはないの？ お国には、さぞかしお美しい思い人がたくさんおありでしたでしょうに……」
「媛……」
豊璋は首をめぐらして、まだ見えぬ祖国の方を向いた。
その背中に、身体ごとぶっつけるようにして額田王は抱きついた。
「どなたのことを思ってらっしゃるの？ 私より、ずっときれいな方？ 私よりもっとはっきり神の声の聞ける方？」
うすものをとおして、異常に発達した乳房が豊璋の背中で息づいた。
もう何年になるだろう。そばにつかえる女たちは多かったが、豊璋はその女たちには手をふれてみもしなかった。額田王の胸の息吹きと、あつい息を後に感じて、豊璋はとつぜん切なさに胸がふるえた。
「媛……」
もう一度呼んだ声はふるえていた。
「ほう、これは大胆な」
いきなりの男の声だ。
「まっひるま、高殿での相聞でございますか」
そこには、ほほをゆがめた中大兄皇子が立っていた。
「いえ、私は、決して」
豊璋は、あわててひざまずいた。
「額田王、わしと大海人では足りなくて、百済の王子にまで思いをかけたのか」
とたん額田王は大声で笑うと、笑いながら階段をおりていく。
「中大兄様。私は決して額田王とは……」
「王子、気にされるな。あれはあんな女よ。それより」
「それより……」
「王子、私たちが、船をそろえて対島を越え、そなたの祖国へ向かうのはいつの日であろうな」
「な、なんといわれる」
一瞬、中大兄の瞳は、さっきの豊璋の目の如くうるんだ。それははるかなる故郷を眺めるものの甘さを含んだ目であった。
「有間皇子様が牟婁の湯からお帰りでございます」
その声に中大兄の目はもとの細い、するどい光をたたえた瞳にもどった。

（二）

「長い長い白砂のなぎさがつづいて、その海を渡ってくる風は、何とこころよいあたたかさだったことでしょう。松の緑はしたたるばかりで、その緑に白い湯けむりが、まるで天女の羽衣のようにたゆとうているのでございます。私の物狂い、憂い心も、彼の地を一目みただけで直ってしまったようでございます」
有間皇子は老いた女帝の前で奏上していた。斉明天皇はその一言一言にうなずいた。
「さぞ、美しく、静かなところだったでしょうね。私もできればそのような地で、病んだ心を癒したく思います」
老女帝の心は病んでいた。可愛がっていた孫の健王が八歳で亡くなったためである。老いた心からはいつまでもそのあどけない笑顔が消えなかった
「陛下、ぜひ一度牟婁の湯へいらっしゃいませ。あすこの景色はきっと陛下の心を慰めてくれるにちがいありません」
言いつつ有間皇子の眼にはつめたい汗が流れる。あの牟婁の湯で出会った不思議な男、弓月の言葉とおりのことをおれはしゃべっている。奇妙な男だった。あいつと話しているとなぜかおれにも、何かとてつもなくでかいことができそうな気がして来たのだ。
父が死んで、当然おれに廻ってくると思った皇位が、中大兄のさし金

で、この年老いた女のところへいってしまった。その怒り、その落胆――いやおれは忘れようとさえしていたのに、あの弓月はたくみにおれの心に火をつけやがった。

とはいっても、おれはこの年老いた女帝には何の恨みもない。このひとも六十をすぎてからの皇位をどちらかといえば迷惑がっている。にくいのは中大兄だ。すべてを自分の意のままに運ぼうとする中大兄だ……。

「いらっしゃいませ、ぜひ一度。陛下。陛下の傷ついたお心を癒すためにも……」

「のう、中大兄、如何なものであろうのう」

「ははっ」

中大兄はジロリと有間皇子をにらんだ。あの目。人の心の底まで見すかすような、細い夕月のような、それでいて深い色。

有間皇子は身のちぢむような思いにうたれつつ、力をふりしぼって言う

「中大兄様も、ぜひ陛下と共に。いそがしい政務のつかれをとるために」

とつぜん、中大兄はワハハハハと大声で笑った。そして笑いつつうなずいた。

「よかろう。陛下、お伴つかまつりましょう」

（三）

いっときざわめいた葦の葉が、しずまった。しずまったとみるや、そこから日の光にかがやくばかりの女の裸身が立ち上がった。

「額田王」

男の声がして、葦の間から大海人皇子の顔がのぞいた。

「お前は、どうして以前のように私に会ってくれないのだ。たまさか会ってくれても、まるで流れる雲か、急流の水の如くあわただしく去っていく……」

それは男の恨みごとであった。

「お許し遊ばして、皇子」

ふざけたように答えた額田王はフワリとうす絹を裸の上にひっかけると葦をかきわけて去ろうとする。

「まってくれ、媛」

そのすそをとらえた大海人の手を、ふり切るように額田王はかけだした。

その姿を、別の葉かげから食いいるように眺めている目があった。大きな目玉、それが一杯に見開かれている。

「どうなさった、赤兄どの」

その男の横に坐ったもう一人の男が声をかけた。弓月である。

「いい女じゃ」

目玉の大きい男、赤兄と呼ばれた男がうめくようにいう。

「蘇我赤兄——どうだ、中大兄のために殺された入鹿、蝦夷の仇をとりたくはないのか。そして蘇我一族の威光をとりもどしたくはないのか」

「……有間皇子か、たよりになるのかな、あの男」

「なる。いや力はない。力は赤兄殿、そなただ。しかし有間皇子が我等の側とすれば、そなたの十の力も百になる。そうであろう。蘇我一族の旗上げは、単なる復讐の戦いとはならず、有間皇子をいただく大義の戦いとなるからな」

「うむ」

蘇我赤兄は考えこむ。

「それしても……」

と考えつついう。

「いい女じゃった」

その額田王は、いま馬と馬との間を歩く。

「ひぃふぅみぃ……」

尻尾の数を数えつつ額田王は歩く。

そこは白布のひきいる能登軍団の駐屯基地であった。

「百五十一、百五十二、百五十三……」

「女！」

いきなりえり首をあらあらしくつかまえられた。

「何しに来た！　何しに我等の兵力を数えている」

「白布は？」

「白布？　こやつ、隊長の名を呼びすてにしおって」

「白布は何処？」

「隊長か？　フン、隊長に会わずともおれがいい目をみさしてくれるわ」

兵士はズルズルと額田王をひきずろうとした。

「いいわよ、それでも。だけど、抱く前に私の名前だけを覚えておいて」

「名前？　女の名などどうでもいいわ」

「どうでもよくないわ。私の名は額田王。さ、それでもあんた抱ける？」

「ぬ、額田……」

瞬間、兵士の手はふるえる。

「さ、おっしゃい、白布はどこ？」

兵士はふるえつつ、一方を指さす。

「ありがとう」

その兵士の口を、すばやく吸って額田王は教えられた小屋へ歩む。

「白布」

と声をかけようとしてはっとしてことばをのむ。

白布は、小屋の中で、玉櫛を抱いていたのだ。

「あの女……たしか出雲族の……」

玉櫛は目をつぶる。その腕にはしっかりと清麻呂を抱いている。

「玉櫛！　おれを見ろ！　白布の顔だ！　お前の許婚者だった男の顔だ！」

玉櫛は動かない。

「くそっ、お前は、そんなにこのおれが憎いか、そんなに弓月が好きか！」

声と共に玉櫛を放り出す。小屋の隅へころげた玉櫛の手の中で、しかし清麻呂は泣かずにぐっと白布をにらむ。

「このガキ！」
白布の手は佩刀をにぎった。
「およしなさいよ」
そこへ額田王が入っていった。
「何もいうことをきかぬ女を、むりやり抱かなくったって」
「額田王」
――黙って、額田王はするりとうすものをおとした。
「この出雲族の女と、私とどちらがすてき？」
「お前、おれに一体何の用だ」
「抱いてほしいだけ。この女の前で。だけど、抱いたあとで、一寸やってほしいことがあるの」
額田王はそういうとわれとわが身を白布にぶっつけていった。
玉櫛は、清麻呂を抱いてうつぶす。その耳にいやでも額田王のおし殺したような笑いがとびこむ。それは歓喜の笑いであった。
その中で、玉櫛は、弓月を思った。

（四）

「天皇と中大兄は牟婁の湯へいった。ことをおこすのは今だ」
弓月がいう。

「天皇と中大兄の失政は三つ」
赤兄もいう。
「第一、倉を建て民の財を集めること。第二、長い溝を掘っての公費の濫費。第三、舟で石をはこび、意味のない丘をつくること」
そこは蘇我赤兄の屋敷の高楼である。
有間皇子は黙っていた。いつの間にかおれはこの二人にあやつられて、しらずしらずおそろしい淵におちこんでいる。いや、ちがう。これはおれがほんとは望んでいたことだったのかもしれぬ。
弓月がいう。
「まず皇居を焼き打ちし、五百人で牟婁の津を封鎖。軍船を出して淡路と牟婁の湯をせめる。天皇と中大兄の命は、そこで落ちる さいわい、我々の味方には、海人族の塩屋連小戈や鯛魚も参加している。水軍は彼らが用意してくれるはずだ」
有間皇子はうなずいた。
と、そのとき、ボキリ！ 皇子のもたれていた脇息の足がおれた。
人々はさわいだ。これは不吉な前兆である。
「やめようではないか。今日はこれくらいにしておこう」
赤兄もいった。
「まて」
弓月はとめる。たかが木の足が偶然折れただけだ。ことは急ぐ。今日、今、すべてをきめて、兵を挙げなければ……。
「いや、すべてものごとには吉凶がある。不吉なことのおきた日に、旗上げの相談などはすべきではない」
塩屋連小戈がいって坐を立った。
「皇子！」
弓月は叫んだ。
しかし、有間皇子もまた坐を立っていた。
その夜、月はなかった。
一番最後に高楼を出た弓月はほっとため息をついた。いまはじめて弓月の心にくらい影がさしたのだ。
と、その目に、闇をうごく白い影がうつった。女だ――それだけを見て弓月は歩み去った。女――その顔を見ておけば、あるいは……。その白い影こそ額田王だったのだ。
額田王は、縁に立つ赤兄に外からよびかけた。「あなた」と親しげに……。

「あ、お前は……」

「私のからだを上げてもいいの。その代わり一寸した証人になってさえくれれば」

「証人に？」

「そう、有間皇子のこと」

赤兄は、胸をつかれるようなおどろきにおそわれた。しかし、そのおどろきは、目の前の白い女を抱けるという喜びにかわっていった。

（五）

寺の縁の下で弓月ははねおきた。どどっという騎馬の走る音をきいたからである。

「しまった」

騎馬の群れは明らかに有間皇子の屋敷へ向かっていた。

弓月はかけた。その弓月の目の前にくりひろげられたものは、おびただしい騎馬の群れにとりかこまれた有間皇子の屋敷の姿であった。

弓月の手が目にもとまらぬ早さでうごいた。小さな鉄の針が前後左右にとんで、馬がはげしくあばれた。

「皇子！」

有間皇子はすでにとらわれの人であった。

その皇子めがけて、弓月は一散にかけた。

「弓月！」

白布の声であった。

ふりかえった弓月は見た。白布の胸にしっかりとつかまえられた清麻呂と玉櫛の姿を。

「一歩でも動いてみろ、この二人の命はないぞ！」

白布の佩力はピタリと玉櫛と清麻呂の胸をさしていた。

「弓月！」

玉櫛はさけんだ。

「私は殺されても、皇子を、皇子を」

「ほほう、けなげな女だ。出雲族の女はすべてそうか」

「白布、卑怯者！」

弓月の声に白布の爆笑が答える。

「どうした弓月、かかってはこんのか」

「弓月、皇子を！」

玉櫛は叫ぶ。

「弓月」

別の静かな声であった。

「私はいい。女と子どもを助けてやれ」

「皇子！」

弓月の手の佩刀がからりと落ちた。

「ひき上げィ！」

白布は叫んだ

「そして、牟婁の湯へ急ぐのだ」

どどっ、能登軍団は走りはじめた。

「またしても、中大兄に……」

ガックリと弓月はひざを折った。

その頃、蘇我赤兄は、額田王を抱くようにして別の道を、牟婁の湯へ急いでいた。

（六）

磐代の　浜松が枝を　引きむすび
真幸くあらば　また還り見む

家にあらば　笥に盛る飯を　草まくら　旅にしあれば　椎の葉に盛る

時に六五八年十一月八日、有間皇子は中大兄に残されているかもしれないわずかの温情に期待しつつこのうたを詠んだ。

しかし、十一月十一日、中大兄は、有間皇子を藤白坂（和歌山県海草郡）で首を絞めて殺した。

有間皇子、十九歳。

（つづく）

ロータリー

東 真一郎
え・水木しげる

こんなロータリーを書くのも仲々大変で……ぼくは仕方なく、きらわれながら某大家（?）の宅を訪問した。

某大家はいう。

「ぼかあ大会社からやたらに高い原稿料をふんだくるのが趣味なんだが、不思議なことにあまりカンゲキがないな。ところが二百円位の菓子をもらうとカンゲキするんだなあ。片手で重いケーキをもらったからというので手にもって歩くのはエネルギー的にみて五千円位の損だろう。しかし、ぼくの心はトクしたという〝原始本能〟が満たされているんだな。

家にもってかえって子供たちが食べた残骸を見るとはじめてそのバカらしさに気づくが、不思議と品物をもらうとうれしいんだな。これは最近の大きな発見だと思うよ。

ぼくは昔、金持（少くともめしを充分に食べているもの）は品物をもらっても喜ばんだろうと思っていた。喜ぶのは貧乏人だけだと思っていた。ところがそうじゃない。品物は大きければ大きいほどびっくりして充実感にひたるね。そのあとで箱を捨てるのにものすごく苦しむけどね」

——それはあんたが長い間貧乏された習慣が残っているからじゃないですか?——ぼくは失礼だと思ったが聞いてみた。

「いや、そうでもないね。人間の本能的なものだよ。ぼくはアシスタントに金をやったり、自分で使ったりすることはおしくないが、二年前アシスタントに古ストーブを二つやったことがある。安いものだけど、なんだかそれを手ばなすとき自分の内臓を一つ失ったような気持になったね。ぼくはそのとき自分の慾の深さに（いや人間といった方がいいかもしれない）おどろいたけどね。だからぼくは、最近になってわかったよ。商売人がやたらに品物をやったりする気持がそれまでわからなかったね」

○

——あなたは墓に小便をかけるとその小便を通してそこに埋められている死者が何者であるかわかるという話でしたが、最近もやはり墓に小便をひっかけておられますか——

「いや最近はだめだ。忙しさでカンが狂ったということもあるが、最近墓地が整理され、きれいになったため、小便をして死者の声を聞くといった気分になれないね。先日も、昔の無縁仏の埋めてある墓に行ったがゼンゼンだめだったね。余りにきれいに掃除されていたため気分が出せないんだ。

墓と対話するにはやはり草なんか生い茂って相手の霊がそこら辺で遊べるようにしておかないといかんよ。

まあこれはウソのような話で、みなへんに思うかもしれんが、ただそう感じるんだな。だからこれからさき科学が発達したらなにか死者との連絡方法も解明され、ぼくの感じもうそでなかったということになるだろうと思うが……」

○

「偉い教育者やジャーナリストがなにか人生が有意義で素晴しいようなことをいうからみんな勘違いするんだな。それもエライ人がいうからよけい勘違いするんだよ。それにシケン、ぼくの体験ではこれほど世の中を暗くしているものはないね。家族も世間もシケンの成績が悪いと幸福をつかみそこねるようなことをいうんだな。だから本人もシケンに何回も失敗すると一生幸福が訪れてこないような気分になるんだ。

ところが、もともと幸福なんて、言葉だけしかないものなんだ。いつまでたったってやってこないはずだよ。ぼくをみたまえ。毎日毎日、寝る時間も充分に許されない生活なんだ。紙芝居時代からこんな生活なんだ。ばかあこれから無意味な生活をしようと思うんだ」と某大家は煙草を喫った。

○

「金ができたら山の中に一軒家を建て山へ柴刈りに行ったり、川へ洗濯に行ったり、虫を焼いて食ったり、こんな生活をしようと思うんだ。原始的な生活こそ最高だよ」

ここで雑誌の編集者がきてあたふたと帰る。氏は言葉を続ける。

「人間は無意味なことをして、酔生夢死するように作られているんだ。有意義なことをしようとするから人生が苦界になるんだな。無意味こそ最高だよ、〝神の声〟だよ……」